

令和7年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月17日実施)	総合評価（3月31日実施）	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>児童・生徒一人ひとりの発達段階や障害の状態に応じた学習課題の設定、指導方法の工夫、教材・教具の開発を推進し、児童・生徒が「すぐにわかった！」「自分でできた！」「自分でできた！」を実感できる授業を実践する。</p> <p>授業において、ICT 機器の1人1台専用端末を積極的に活用し、学びのツールとしてタブレット端末の活用を積極的に実践例を積み重ねる。</p>	<p>①児童・生徒の実態をふまえて学習課題を設定し、指導方法の工夫により「すぐにわかった！」「自分でできた！」と実感できる授業を実践する。</p> <p>②学校の授業、家庭での活用を推進し、学びのツールとしてタブレット端末の活用を拡げる。</p>	<p>①発達段階や個々の障害の状態についてアセスメントを行い、共有する。校内研究、サポートプログラム等を活用して「すぐにわかった！」「自分でできた！」と実感できる授業を実践する。</p> <p>②学校の各授業で実践を行い、共有する。クラスルームを活用し、休業期間等に行事の学習や教科学習の振り返り、課題の提出等を実施する。</p>	<p>①児童生徒のアセスメント結果を共有することができたか。校内研究、サポートプログラム等で得た内容を取り入れて「すぐにわかった！」「自分でできた！」と実感できる授業を実践することができたか。</p> <p>②学校での授業実践を共有することができたか。家庭と連携し、実態に合った課題設定により自主的な学びにつなげることができたか。</p>	<p>①個別教育計画作成マニュアルを見直し、根拠に基づいた個別教育計画を作成することができた。校内研究では、各グループで積み重ねてきた実践と検討のまとめを報告会で共有した。サポートプログラムでは実態に応じた授業展開アドバイスができた。</p> <p>②校内 ICT 研修では、教員のスキル向上を図った。長期休業中に生徒が端末を持ち帰った際に使用状況の確認や、保護者と相談してアプリダウンロードするなど家庭での活用を促す取り組みを行った。 ・汎用性の高いアプリを使用しクラス目標やポスター製作等に組み込んだほか、ICT 支援員と連携し、個々の実態に合うアプリ作成に取り組んだ。</p>	<p>①校内研究で整理した個別教育計画項目表等を学部で落とし込むことや、児童生徒のアセスメントを学部で話し合い次年度に繋げている。サポートプログラムではより活用しやすくして、校内研究を含め、授業の実践に繋がるように取り組む。</p> <p>②さらなる ICT 活用のためには、教員間のスキル差を埋める校内研修を継続し、ICT が得意な教員がサポートする体制が求められる。授業での活用・実践例を校内で共有する機会を設けることも重要である。家庭での活用については、具体的な活用例の紹介や家庭学習を支える情報発信を充実させる必要がある。</p>	<p>①保護者アンケートで肯定的評価92% 子どもが興味を持つ内容で課題を設定し、発達段階に応じた個別対応をしている。 生徒のできる部分を引き出す関わりをしてほしい。</p> <p>②保護者アンケートで肯定的評価66% どのように活用しているのか、また家庭での活用方法の連携がやや不足していると思われる。 活用の様子を見る機会があるとよい。 活用の結果をデータ化して成果を見えるかできるとよい。</p>	<p>①児童生徒のアセスメント結果を共有して、個別教育計画を作成した。研究やサポートプログラムにより授業実践の共有や授業展開のアドバイスを受けて授業実践を行った。</p> <p>②教員向けの研修による ICT スキル向上を図った。生徒が自宅で端末を活用できるようにアプリ導入することを家庭と協力して実施した。 どのように活用しているか家庭への情報提供を行うことが課題。</p>	<p>①継続してアセスメントを活用し、個別教育計画に落とし込むことや、サポートプログラム及び校内研究を進めて授業実践につなげていく。</p> <p>②校内研修を継続し、教員間のサポート体制を充実させる。 授業実践内容について、具体的な内容で家庭への発信を行い、家庭との協力体制を築く。</p>
2 児童・生徒 指導・支援	<p>児童・生徒一人ひとりが互いの人格や多様性を尊重し、自他を大切にすることを互いにかかわりながら生活する力を育てる。</p>	<p>①-1 授業や学校生活を通して、互いの人格や多様性を尊重し、自他を大切にすることを育てる。</p> <p>①-2 相手や自分を大切にすることを意識を持ち、SNS 等を有意義に活用できるようにする。</p>	<p>①-1 授業等で児童生徒が自ら発表する機会や、他者の発表を見聞きする機会を設定する。</p> <p>①-2 保護者・教員対象に研修を設定し、SNS 利用のリスクと危機回避について具体的に学ぶ。また、日常生活の指導等でマナーを守り相手を思いやる行動について考える機会を設定する。</p>	<p>①-1 授業等で児童生徒が自ら発表することができたか。また、他者の話を聞くなど相手を尊重する行動につながったか。</p> <p>①-2 研修会の内容をふまえて、日常生活の指導等でマナーを守り、相手を思いやる行動について考える授業を実施することができたか。</p>	<p>①-1 発表や相手を意識した関わりでは、授業における作品や取り組みの発表など、場面を設定して実施した。また、教員が生徒の見本となったり、間に入ることで他者を意識したり、大切にしたりしようとする姿が見られるようになった。さらに、学部間交流では部門を越え、相手を意識したかかわりを行うことができた。</p> <p>①-2 NTT ドコモによる保護者対象の SNS 研修内容を高等部の保護者と教員とで共有し、日常生活の指導に生かした。 ネットリテラシープログラム「レイの失踪」を B 高等部、分教室を対象に12月に実施した。ゲーム形式の学習形態は生徒の興味関心を高め、ネットリテラシーを高めることができた。</p>	<p>①-1 授業など設定された場面だけでなく、日常のやり取りの中でも、気持ちや考えを伝え合う機会を意図的に設けていきたい。教員が継続して手本を示し、適切な場面で価値付けを行っていく。他者の発言や行動に目を向けられるよう、振り返りの時間を取り入れ、自他を大切にすることを言語化できるようにしていく。</p> <p>①-2 発達段階に応じた適切な SNS に関する学習内容を検討し、保護者と学校とで情報を共有しながら取り組んでいく。 また、継続的にネットリテラシープログラムを利用するための予算の確保し、今後もスマホなど身近なものだけでなく、より広い意味でのネットリテラシーを学習していく。</p>	<p>①-1 保護者アンケートで肯定的評価91% 枠にあてはめない自由な作品が良い印象。 子どもがあいさつを交わっている場面は気持ちよい印象。</p> <p>①-2 保護者アンケートで肯定的評価57% SNS は危険があるという情報は理解できた。 本人の理解が大切だと思う。</p>	<p>①-1 授業での互いの発表や作品を見る活動により、他者を意識したり、大切にすることを育てる取り組みができた。 校内の交流の幅を広げてさらに自他ともに大切にすることを育てることにつながるとよい。</p> <p>①-2 保護者向け研修会、生徒向けの授業により、SNS の活用についての理解を深めることができた。 学校での実践例を家庭にも発信して家庭との連携を深めることが課題。</p>	<p>①-1 授業での発表や作品交流等で互いを認め合う活動を継続することにより、相手を尊重する行動につながっていく。 校内交流の幅を少しずつ広げて人とかわる経験を増やしていく。</p> <p>①-2 保護者向け研修会と生徒向けの授業を継続して SNS の活用について理解を深めていく。 学校での実践例を家庭に発信し、知っていただくとともに SNS 利用によるトラブル予防につなげる。</p>

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月17日実施)	総合評価(3月31日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	成功体験を積み上げる教育活動により自信や意欲を高めて、将来の自立と社会参加や、自分らしい生き方を見つけるための支援を行う。	①-1 一人で、あるいは仲間と協力して活動に取り組み、成功体験を積み重ねて自信や意欲を高める。 ①-2 保護者向けの学習会や見学会を実施し、児童生徒が卒後の自立と社会参加のイメージを持てるよう、指導・支援を行う。	①-1 児童生徒がそれぞれの役割を果たし、仲間と協力をしながら進める教育活動を計画し実践する。 ①-2 小中学部段階から、教育部門や学部ごとに施設見学会を実施し、保護者や児童生徒が、直接先輩や施設職員の話聞く機会を設ける。	①-1 一人で、あるいは協力して取り組むこと役割を果たすことにより、自信や意欲を高めることができたか。 ①-2 各学部のニーズに合わせた説明会や見学会等を実施し、児童生徒が、将来の自立と社会参加のイメージを持つことにつながる指導・支援を行うことができたか。	①-1 (小中高) ☆柿祭やアートコース発表会において、それぞれの役割を果たし仲間と協力して発表や製品販売ができた。参観者からの評価をいただくことで達成感や意欲向上につながることができた。 ①-2 今年度は、学年、学部、部門など対象を分けて進路学習会を設定することができた。また、施設見学会についても、横浜市、川崎市肢体不自由部門向けなど、多くの方が参加できるように実施することができた。	①-1 仲間と協力した取組は、継続して計画する必要がある。また、次年度は他学部や他部門との連携が図れるように、年間指導計画に落とし込み計画的に取組んでいく。 ①-2 進路面談は、早い段階から本人のニーズ、保護者の願いなどを丁寧に聴き取りながら実施する必要がある。それを受けて、自立と社会参加のイメージを持たせる指導・支援を行っていく。	①-1 保護者アンケートで肯定的評価90% ☆柿祭は地域となじんでいる雰囲気がある。指導の工夫により気持ちを引き上げて生徒の表現活動が活発になっている。 ①-2 保護者アンケートで肯定的評価89% 小学生から、卒業後のイメージや必要な力について知ることができるのは良い。 部門を分けて説明会を実施して欲しい。	①-1 ☆柿祭やアートコース発表会では地域の方の良い評価もあり児童生徒が自信を持つことにつながった。校内連携の活動継続が課題。 ①-2 生徒や保護者のニーズに応える形で学習会、見学会を自己選択の機会として実施することができた。毎年のニーズに合った内容で継続することが課題。	①-1 継続した取り組みとして、他学部や他部門との連携が図れるように、年間指導計画に落とし込み計画的に取り組む。 ①-2 児童生徒の実態や地域の状況把握により、事前にニーズを把握したうえで学習会、見学会を計画する。
4	地域等との協働	地域社会を実践的な学びの場ととらえて、日々の学習で培った力を地域社会への貢献活動として発揮するなどの取組を教育課程に位置付けて実践する。 地域に開いた学校行事を、地域と連携・協働して企画する行事に発展させ、継続する。	①地域社会で学ぶ内容を教育課程に位置付けて、地域のことを知り、清掃等の貢献活動により自己有用感を高める。 ②地域の協力を得てイベント等を実施し、交流を深めるとともに学習の成果を発信し、地域と学校との相互理解をすすめる。	①児童・生徒の地域活動として清掃活動、施設の活用等に取り組み、HP等で発信する。 近隣大学との授業等の連携について模索し、実施につなげる。 ②20周年記念事業で近隣の関係機関等との協働活動に取り組み、一緒に楽しむイベントを実施する。	①地域社会で学ぶ内容を教育課程に位置付けて実施し、児童生徒の自己有用感を高めるとともに、活動内容を地域の方や保護者に向けて発信することができたか。 ②地域の協力によりイベントを実施し、交流を深めるとともに児童・生徒の活動の成果を発信し、地域との相互理解を進めることができたか。	①近隣の虹ヶ丘小学校やこども文化センターに行き、清掃や本棚整理等を行い、自己有用感を高めることができた。文化庁交流事業で、地域で活動している講師を招き、バレエと一緒に踊る活動を楽しみ、地域とのつながりを感じることができた。 ②地域や近隣大学、元石川高校美術部の協力のもと20周年記念事業を実施し、学校の取り組みを発信するとともに相互の理解を深めることができた。また、この事業の協力依頼を機にボランティア活動へとつながった大学もできた。	①連絡帳や学部だより等で保護者に生徒が真剣に取り組んだことや、楽しそうに活動した様子を伝えることができた。今後も地域社会で学ぶことを意識しながら活動の計画をしていく。 ②20周年記念事業で関わりをもった地域の方や大学との継続的な協働活動を進めていく。	①保護者アンケートで肯定的評価70% 地域貢献活動(清掃等)は、学部や学年を問わずもっと積極的に行うと良い。 ②保護者アンケートで肯定的評価80% 20周年記念事業を、地域交流を活かす形で実現し、音楽隊の演奏で子ども達が躍り表現し、会場参加者が一緒に楽しめたことは、子どもからの発信を待ち、受け止める態勢が実現されている。	①近隣施設の清掃活動を通じて自己有用感を高める活動ができた。活動内容を地域、保護者へ発信し、充実した活動の継続が課題。 ②イベントでのつながりを引継ぎ、地域の方と学校との相互理解を深めていくことが課題。	①ホームページや通信等で各学部の活動を発信し、地域や保護者の方が知る機会を増やす。 ②今回イベントに参加した団体と、相互の行き来や活動への参加などを模索し、実施につなげる。
5	学校管理 学校運営	「児童・生徒への丁寧なかかわりのスタンダード」を活用し、児童・生徒が安心して学ぶことができる学校にするとともに、取組の好事例を共有する仕組みを構築して、短期間で内容の充実・更新を図る。 災害時や非常時に備えて、関係機関と協力して訓練・研修等に取り組み、児童・生徒が安全に学ぶことができる環境を整える。	①「児童・生徒への丁寧なかかわりのスタンダード」について、職員同士や、職員と保護者などで話題にしてみんなで考えることにより意識向上を図り、児童生徒への指導につなげる。 ②災害時、非常時の対応を整備し、緊急時に適切な対応ができるように備える。また、スクールバスの運営の円滑化を図る。	①「児童・生徒への丁寧なかかわりのスタンダード」について職員間で話題にする時間や、職員と保護者などで話題にする時間を設定する。 ②避難訓練や引き渡し訓練実施後振り返りを行い、改善点を計画に反映する。校内危険箇所を共有する。スクールバスGPSの保護者利用を進める。	①「児童・生徒への丁寧なかかわりのスタンダード」について、職員同士や、職員と保護者などで話題にしてみんなで考えることにより意識向上を図ることができたか。 ②訓練の内容をブラッシュアップすることができたか。校内の安全環境が改善されたか。GPS機能の保護者利用を進めて安全な運行につなげることができたか。	①各学部で取り組んだほか、8月職員会議後に少人数で他学部の職員同士で子供のことで話し合いを設けた。保護者との話し合いは設定が難しく、今年度は人数を絞って聞き取りを行った。 ②怪我人を想定した全校参加の避難訓練を行った。より実際に近い形で訓練を進めた。また、スクールバスドライバーと介助員のAED講習を実施し、より安全な運行に寄与した。4月に導入したGPSの利用も保護者に定着した。	①職員同士の話し合いは1学期末でもよい。保護者との話し合いは、開催しやすいように新入生保護者を対象にできるとよい。これらの話し合いと実践を踏まえてスタンダードのブラッシュアップを図る。 ②より違うシチュエーションを想定した避難訓練を行うことで、災害時などでの対応力を高める。またSBの安全安心な運行を目指し、より緻密な安全対策を施していく。	①保護者アンケートで肯定的評価85% スタンダードを直接指導する教員の声を内容に反映させるとよい。 面談やクラス全体での話し合い等で具体的に力を入れているところを伝えるとよい。 ②保護者アンケートで肯定的評価87% バスGPSはありがたいが、正確でないときがある。 校舎の出入り口が誰でもすぐに入れる状況が非常時には心配がある。	①他学部の職員同士で子供のことで話し合い、同僚性を高めるとともに子どもへのかかわりを共有した。保護者と職員との話し合いの実現が課題。 ②怪我人を想定する等実際に近い形で避難訓練を進めた。GPSの利用も保護者に定着した。異なる設定で避難訓練を行い、非常時の対応力を高めることが課題。	①職員間での話し合いを継続するとともに、新入生保護者を対象に教員と懇談会を設定する。 ②スクールバスからの避難や、防災関連の設備を実際に稼働させる訓練を行う。